

この心如来となる

お釈迦様（ブツダ）のさとりの道を掲載していくにあたり

資料の揭示の意味は、お釈迦様の誕生から涅槃、大般涅槃までの間、どこで、どういう方々に、何を法話されたのか、それがどんな原始経典であらわされていたかを揭示していきたいと思えます。いつ、どこで、誰が、誰に、何を、どう語った書かないと、単なる物語になってしまうものですから。

最初は誕生から語っていきなさいと思えます。誕生は、人身受け難し、今すでに受くと述べられているように、ひととして生まれた事が尊いことを教えて示しているのです。釈尊が誕生をしてブツダ（覚者=さとり）となられた。この等正覚、等は誰でも必ず正覚（まさしくさとる）者になることを教示されたことなのです。阿弥陀如来の本願は、ブツダの道を今この浄土を通してあらわにしているのです。そのブツダの道は、誕生を祝うこと、ひととして生まれたことを喜ぶべし、ひととして役割をもって生まれてきた、終わりはそれぞれを仏法の道に導くことであるのです。

お釈迦様の誕生地は、稲作を作っていた場所で、父親が浄飯王（ストトダーナ・悉達多）と呼ばれていた。これだけで日本との食文化のつながりを感じます。お釈迦様は今のネパール国境近くの中インド、カピラエ国の王子として生まれた。幼い頃からたいへん賢く思慮深い性格であられたという。この性格は米作りの地であった場所で生まれたからできたのではないのでしょうか。日本民謡では『米という字を分析すれば、八十八たびの手がかかる』つまり、米を育てて人々の口に入るまでには、一年かけて手がかったものである。米

はカラを破り、中から白米をたいて食べる。稲は実りをむかえる。その姿を「実るほど、頭を垂れる稲穂かな」と、実りは果実というものを示し教示した。そして実った時、死という観念ではなく、実りとなる人生を示し、実には種を含み、種はやがて次の世代に受け継がれていく。これを無常という。無常は、いのちが果実（結果）、種、芽、葉、花、果実と変化し、受け継がれていくことを示すのである。この心は今にとどまらない。必ず目的をもって、ご縁者によって成長をしていくのである。

しんらんさまかるた

まちぶせ
している
あらほうし



吉水の法然上人の教えは、老若男女、貧富貴賤を問わず皆ともに救われるという教えでしたから、その評判は日増しに高まり、ついに比叡山や奈良の気の荒い坊さんたちに妨害され、厳しい弾圧を受けることになりました。

積尊の誕生は王子として祝われたことに始まる。この世に誕生してきたことを祝ってもらえた、祝ってもらえない、この差は祝ってもらえた釈迦が仏陀になり、誕生をのろわれたアジャセ王が殺人者となったのでした。

それでは誕生をどう祝うべきであるか。ケーキを買って、オモチャを与えれば、特別の日を作って家族で祝い日をつくるのがよいのでしょうか。それではわが家、私だけの我ではないのです。やらないよりはやった方がよいのですが……（つづく）

め
なみだをためて
おわかれ

法然上人の念仏の教えは、激しい弾圧を受け、ついに専修念仏は停止され、法然上人とその門弟は流罪や死罪に処せられました。そして法然上人は四国讃岐へ、親鸞さまは越後国府（直江津市）へと、悲しい涙の別れをしなければなら



承元元年の念仏弾圧によって、親鸞さまは越後の国府（直江津）へ流罪と決まりました。名前も藤井善信と改められ、先生の法然上人と別れて、京都を離れなければなりません。それは、この世で再び出あうことのない悲しい別れでもありました。

る
ざいで
えちごへ
しんらんさま

